



その七

皮膚

あれから四日になる。私は、あの時とは打って変わった病院の白いベッドの上に、寝ている。窓からは午後の陽ざしが、病室の白い壁に映って、四辺は眠いように静かだ。窓の上の大空には、もう秋の気配の白い雲が浮かんでいる。同室患者は一人だが、その男もベッドに仰向に寝て、白い夏布団を胸にかけて黙っている。眼をつむっていないところを見ると、何か考えているのだろう。付添婦の老婆は、さっきまで廊下で他の付添婦と立ち話をしていたが、何処かへ行ってしまった。

私は今までのことを、色々思い浮かべていた。あの時飯が食えない腹立たしさ情けなさに、井を放り出して寝床の上のけぞりながら、暫くの間は泣き声ともわめき声とも判らないような声を立てて、堪らない気持ちに紛らせていた。しまいには、あらゆる神経の疲労が押し寄せて来て、私は不快を極めた、重苦しい眠気におそわれた。そして少しは眠ったかも知れない。間もなく私をとり巻いてブンブンいつている蚊の音で、我に還った。も

う夕方はずぎて、真っ暗になっていた。空腹は一層激しくなっていた。私は昼間病院で、夜の八時にもう一度湿布を取り換えに来るように、と医師から言われたのを思い出し、起き上ってそのまま病院へ出掛けた。病院でマスクを取った時、私は看護婦に口を思い切り大きく切り開いてもらった。しかし手の方はどうにも改良の仕様がなかった。それから家へ再び戻って、さっきのような工夫で、やっと覚束なくも空腹を満たすことが出来た。その夜は痒みこそ少なかったが、湿布のじめじめした気持ちの悪い肌ざわりと、蚊の襲撃で睡眠は思うようでなかった。手の繃帯のために、蚊やりが焚けなかったのだ。翌日こんな有様ではとても堪らないと思ったので、伊原先生にお願いして入院することに取り計らってもらった。私はすぐ手回りの品二三と着たままの浴衣で入院して、それから現在こうして寝ているのである。

入院してからは、一切不自由しなくなった。食物も起ち居の便宜も、すべて病人本位に出来ている。もちろん、病院だからそれは当り前のことだが、私は入る前にはこんな快適な場所が存在しようとは、想像さえしなかったのである。健康な時の私の独居生活よりも、遥かに快かった。病気も入院した一日二日で峠を越して、苦痛に思うことはなくなってしまう。こんなことと知ったら、あの日すぐ入院するようにすればよかった。最初の手当てをした時に、そのマスクや繃帯の自分の生活に及ぼす影響に気がついて、少し考えればよかったのだ。私は怪物的な姿の人を驚かすことばかりを不安に思っ、あとで着物を着換えることも、帯を締めることも出来ず、自分が空腹を満たすことも出来なくて、餓児のように泣いて腹を立てようとは思ってもよらなかった。あの日、昼間病院にいる間にそれを察して、手続きをすればいいのに、ただ呆んやりしていた。一寸した頭の動かし方である

が、何時ものように、如何にも私らしい考えの足りなさがある。

それにしてもここでこうして考えていると、あの時腹を立てて泣いたのが、滑稽で仕方がない。私は可笑しくなつて、笑い声を立てた。隣の男が吃驚して私の方を向いた。

「どないしましてん」

私は、ついそれに答えるように微笑して見せたが、しかしこれはすぐ無駄だと気が付いた。私はマスクを忘れていた。

「あんたはん、いま笑いはったんか」

——話しかけても少し心もとない。——彼の言葉はそう言っているようだった。わたしも、改めて答えた。

「ええ、一寸可笑しかったもんで……」

「思い出し笑いだったか？へへ」

「ええ」

私も半分笑った。しかし心の中では、自分のマスクのことを考えていた。入院してから見舞客が二三人来た。その一人が写真器を持っていて、私の姿を一枚写した。出来上がって持って来たのを見ると、私は自分のことながら笑い出さずにはいられなかった。白いベツドの上に、格子縞の浴衣を着た姿が坐っている。頭全体は真っ白である。その真っ白の中に目鼻口の四つの穴が、ポコンポコンと開いている。何だか奇怪な笑みを浮かべているような表情だ。映画に出て来た透明人間そっくりだ。両手も繃帯で丸くなっている。これには、氷嚢が一つづつ載せてあつて、その氷嚢を吊るした二条の紐が、頭の上の鉄の棒から鋭角をなして両手に下りている。これが、ベッドの上に坐っている私であった。陋屋ろおくで

泣き喚いたのもこの怪物であった。

人が見たら何と思うだろう。しかしあの時子供のように泣けたのは、それは反ってこのマスクのあったためではなかったろうか。自分の平常の大人として通常人として持っている顔の皮膚が、マスクで覆われたことは、顔の表情そのものを失ったことだ。我々の自愛心、自誇心なども、この顔の皮膚感覚にあるのかも知れないと思うと、このマスク一重が私の自愛心とか見栄とかを、すっかり除いてしまったのではないだろうか。よく人は「裸になれ」と言う。しかし、そういう意味の裸と同じ効果が、今逆に余計に覆ったために出来たのだ。私は今ここでこの見栄も外聞もなく泣いたことを、いいとか悪いとか俄かに判断できない。しかし、若し人がそれをいいと言うならば、人よ須すべらくマスクを被かれ、だ。そうすれば人はかなり単純に小児の如く泣くことが出来るだろう。強盗が他人の家に押し入って、金をよこせと言う、偽らざる真情を吐露し得るのも、多くの場合彼等が覆面している所為ではないか。しかしこれは一方的な自分だけの話である。これが他の人間との会話となるとそう簡単に行かない。

隣の男は体を少し起こして、寝ている姿勢をこちら向きにした。

彼は、年はもう五十を、二つ三つ越しているだろう。頭は裾を刈り上げて、上の方に髪を小さく分けている。金縁眼鏡。大げさにぐりぐりする狡猾な眼。笑うときに寄る目尻や頬の皺。薄い唇に大きい口。その口にキラキラ光る金歯など、一目で商人と判る男であった。言葉は紛れもない関西大阪である。実は私はこの病室で、最初に彼の大阪弁を耳にした時、非常に思い掛けない気がしたのであった。第一場所土地が、そんな大阪弁などとはてんで縁がないようなところに思える。こうして黙って四辺の静かな中に寝ていれば、こ

の病室の方形な白さが、全国的の、或いはひよっとしたら世界的かもしれないと思われるような普遍的な、ある種の非人間的なものを感じさせるのであるが、しかし何と言っても、ここは仙台の町中である。付添婦は勿論、看護婦までも口を開けば殆ど仙台弁である。医者の中にさえも、相当聞き辛いのが少なからずいるのである。付添婦達の会話となると、全く難解である。例えば廊下の外で足音がして、隣の付添婦がドアの外で大声で怒鳴る。皮膚科（泌尿科が付属している）の付添婦は誰もがさつだ。病気の性質が内科や外科のようにデリケートに深酷でないからだろう。その声は言う。

「コップガエンカア」

割れ鐘のような声だから、声はよくきこえるが、その意味と来たら、私にはてんで判らない。するとこちらの中の方から、この付添婦がそれに返事するのだ。

「ガス」

これがまた、喉にからまった痰を、気合をかけて、吐き飛ばすような声だ。付添婦は出て行って、また戻って来る。そして暫く呆気にとられていた私が訊ねるのだ。

「おばさん。今のは一体なんですか」

「何ツツヤ？」

付添婦は反問するが、私の疑問が判るとハハハと笑う。それで婆さんが変な東京弁で説明するのだ。隣の付添婦は、これは増田トヨと言うが、その増田婆さんの言葉はこうである。

「コップが御座いませんか」

そこで、この鈴木ブン、即ち鈴木婆さんが答えるには、

——御座います——

と言うのである。こういう言葉の中にあつて、なめらかに軽い関西アクセントを聞いた時、私が一寸耳を疑うような気持ちになつたのも、無理ではないだろう。何でも、一番最初これを知つたのは、私が入院してこの病室へ来て、ベッドに横になつて、一時間ばかりした時であつた。それまで黙っていたこの男が起き上つてベッドから下りて、スリッパを足にした。彼はこの病室の入口の付添婦の控部屋に向つて、声をかけた。

「おばさん」

それで、この時私は、おや、と思つたのである。全体の声の、音色的なめらかさは、これだけで明瞭に上方である。彼はまた呼んだ。

「おばさん」

返事はなかつた。留守なのだろう。彼は居ないと知ると、及び腰になつたような変な腰付きで、ソロソロと足をうごかしながら病室から出て行つた。

私が、彼と話を交わしたのはその翌日からだつた。彼は仙台近くの或る温泉町の宿屋の主人だつた。商人の彼が病室の退屈にも似ず、一日も新入りの私と口をきかずにはいたのは、私の怪物面も原因だつたらうが、恐らく病気のためだつたらう。彼の病気は、淋病だつた。軽くはないようで、苦しうだつた。しかし、私が入院して、二、三日すると、目立って元氣になつて来た。これは私と打解けたから、と言うよりも病気の好転したためらしかつた。

彼は、こちらを向いたが、大儀そうに、再び仰向になつた。そして、眼鏡を外して、枕元のガーゼの布をとつて、丁寧に拭いた。

「ええ年して、こんな病気で入院してまんねん……若いあんたなら兎も角……考えて見たら、恥しいことですわ」

彼は突然こんなことを言い出した。私は花柳病を余り結構な病気とは思っていないが、と言って、こうしていて彼を恥ずかしがらせる程、私の病気が特に道徳的に勝れているものとは思えなかった。私は一寸返答ができなくて、黙って顔を彼の方へむけていた。彼は眼鏡に息をかけてすかして見て、それを拭いた。

「もつとも、今更ここでそれを言うたところで、どうもならしまへん」

彼は、拭いた眼鏡をかけて、眉を一寸動かして眼鏡の位置を直した。

「私はこの病気になるのは、もうこれで、五度目です」

私は、驚いた。

「五度目と言いますと、何ですか。そりゃ、再発の意味じゃないのですか」

「いや、再発やおまへん。仕様むない。みんな新しい感染だったのですわ」

彼はこつちを向いて、顔中を皺だらけにして、音もなく笑った。私もその自笑的な気持ちを察して笑顔を作ったが、これは例によって相手には通じなかったようだ。彼はまた仰向になった。私のマスクからは、何の返事の表情も得られなかったからだろう。こう言う調子で、私と他人との対話は何時も少し食い違つて来るのだつた。

「わたしは若い時分、行商しとりましてん。方々廻りましたから、自然、身持ちも悪かつたのですが、……二十六の時、やられました。その時の相手は、女郎でもなんでもない。皮肉な話ですわ。わたしもそれまで、病気の恐いことを知らんと言うてはなし、うつつたらあかんと思うては居りましたんや。それが、この女はまあ……年は十六で、玉突き

ゲーム取りだしたが……：：：こんなんやったら、大丈夫と思うたのが、……：：：こいつがえらい病気持ちで　　どうも妙な臭いがすると思いましたが、こっちはそれで用心するほど、まだ経験がないし……：：：一ぺんに、非道いことやられました……：：：これが、最初で」

彼が、この終りの言葉を言った時は、まるで独り言のような、自分に言いきかせているような調子だった。――これが最初で――

二度目は？

「それからは、何時も、商売女からばっかりです。　　の用意をしなければ、必ず。……：：：もう」

私にはその後、何時も同じ経路で、遊女からばかり罹病したと言うのが、何だか話としては少し物足りなかった。しかしそれが事実だったのだろう。

「この病気は、一度罹ると、治っても感^っ染^り易うなりますな」

「一体ほんとうによく治るものでしょうか」

「そら、治ります。病を奥へやらん限りは……：：：治ります」

「でも随分、難しいそうじゃありませんか」

「そうです。厄介です。大事なことは、つまらん町医者などにかからんことです。いやもう、そんななんにうっかりかかろうもんならえらい目に逢いまっせ。矢っ張りこういう信用のある病院へ入院するのが一番です。そら金はかかります。こういうところにはいれば金は要ります。……：：：わたしは、今度はこれで、千円はかかると思ってます。しかし悪い医者にかかって下手な洗滌でもやられた日には、それこそえらい目に逢いまっせ」

「　　は、矢っ張り、あの　　製品ですか」

「そうです。あいつが一番です。でも、あれは、情のうつらんもんで、……情がうつらんと言えば、予防ということが、そもそも情のうつらんもんで……ひどいことこの病気にやられると、誰もこりません。で今度からは、と申うて用心しますのや。そやけど、通うのが二度三度から四・五度になる。女の気持も解って来る。ええそれは判ります。商売人かて嘘ばかりやおまへん。こつちも嬉しうなる。肌を見たらつやつやしてると、顔を見たら、ええ顔色やし、こんな女子に病気などあるもんか、と思ふようになって来る。女子に馴染んで来れば、病気の恐ろしさも忘れて来ます。しまいは予防したりするのが、阿呆らしくなつて来る。そいで、ついふらふらと、一ぺん、と申う気になる。もううなつたらあかん！それで一切がっさい、おしまいです……」

「そう言つて彼は、黙つてしまつた。」

私は彼の横顔をじつと眺めた。その眼には、いつもの商人くさいキョロキョロした表情がすっかり無くなつていた。彼の言葉によると、一人の遊女を馴染になるほど、買い通うと言ふのは、どうしても病気にかかることを覚悟してやることになるらしい。いくら病気に對する恐怖と、予防の意志があつても、心理的に無感覚無防備を起させるものがあるのだ。たとえ男女の愛情とまでは言わなくても、少なくともそこには馴れの恐ろしさがあると言えるだろう。そばへよれば汚くなる。汚いという気持ちを保つためには、結局離れてゐる必要があるのだ。

彼がすっかり黙つてしまつたので、私は話をつぐつもりで訊ねた。

「予防には、もっと簡単なのいすか」

「葉でやるのもありますが、刺激したり予防が完全に出来なかつたり、矢つ張り駄目です。」

のもありますなあ。あれなら刺戟はのうて、よろしいが……あれもええけど
何もかも　なつて、始末が悪うて、えらい興醒めなもんですわ」

私達は、声を立てて笑った。

「ここに持つてますが、これは、独逸製です。こんなら大丈夫です」

彼はベッドの傍にある備え付けの戸棚の引き出しから、小さい壘を出した。錠剤がはい
つているようだった。これを私に見せて、彼はニヤリとした。私は眼を丸くした。

こんな風で寝ていながら、彼は一体この薬を何のために持っているのだろう。この病氣
が完全に治癒するときには、まだ恐ろしく先のことだろう。さぞ待ち遠しくて彼自身は十年
先のようにでも思っていることだろう。そういう先の用心の薬を、こうして枕元に持つて
寝ている。これが女買いの気持なのだろうか。

ドアが開いて、看護婦がはいつて来た。隣の男はそしらぬ顔付をして、薬を枕の下に
入れた。看護婦は、手に持つて来た検温器を私に見せた。

「代わりを持つて来ました」

「ああ、有難う」

私の検温器は壊れていたのだ。隣の男が声をかけた。

「清見さん。清見さんが、この病棟で、一番美しい。綺麗なばかりやなしに、愛嬌があつ
て、いつもニコニコして……」

看護婦は検温器の容器を紐で私のベッドの手摺にしばらくしながら、
「いつもあんなことを」

と睨んだ。隣の男は面白そうにからかった。

「いや、ほんと！」

そんなことを言っている彼の声をきいていると、これがその五十面から出ているとは思えなかった。

「そんな風にいつもニコニコしているのを見ると、ええお嬢さんが決まったんと違うか」

「そんなものありませんよ」

「清見さん。それはそうと、青木先生になあ、さっき内科へ行って見て貰うたと言うて下さい」

「はい」

看護婦は事務的な顔付きになった。

「もうすぐ、回診です」

「あ、そう。それなら、私から言いましょう」

看護婦は出て行った。

隣の男は顔をこちらへ向けて、

「ええ子です。なかなか……：：：気立ても悪うないし」

私達は、暫く黙った。遠くの方で廊下を駆けて行くスリッパの音がする。短い間再び静かになった。彼は枕元の函面を取り上げた。寝たまま拵げている。私はそちらを向いた。

「それ、何です？」

隣の男が昨日からその函面を見てはしきりに考えているので、私は訊こう訊こう思っていたのだった。

「これはその、なんです、わたしの家で、今度新築しようと思ってますのや。まあ病院に

いて、ただ寝ているよりは、空いている頭と手だけでも、働かす方が、ええやろ思いましてん」

「どれ、拝見」

私はベットから下りて、遠慮なくのぞき込んだ。

「新築というても、建て増しで古い家にそうて、こう建てるつもりですが、間を何でつなごうと思うてますのや。……矢っ張り、廊下がええやろう思うてます」

私は図面を見て、座敷を勘定した。

「これ、十畳ですか。それから八畳と。六畳と、四畳半が二つですか。これは上ですか、下ですか」

「二階です」

「二階ですか。大分広い二階ですね」

「総二階です。……えらい梯子段が多ますやろ。商売家は色々客がありますさかい。表から揚げるんや、裏から揚げるんや、……なあ」

「成程……こりやあ、理想的な四畳半がありますねえ」

私は押入れと梯子段にはさまれた四畳半を指した。彼はわるがし狡そうに眼を瞬たいた。
「このは、ようになつてます」

は座敷だった。

「なに、中に、判りません。……こう言うのは、何処にもあるものです」

このが、果たして客のためであるか、何のためであるか知らないが、彼は

そうに、一寸声を落して説明して、微笑った。

付添婦が、慌ててはいって来た。

「さあ、回診回診」

鈴木婆さんは、何か持って来たものを、付添控室に放り込んでおいて、急いで用意をはじめた。隣の男の足の方に耳盥のようなものをおいて、手を洗って私の繻帯をほどいた。私のマスクをはずしている間に、もう副科長がやって来る音がした。廊下にドスンドスンという激しい足音をさせて、何時もの大きな声で何か看護婦に話しながらやって来る。ズんぐりした体を白衣につつんで、金縁眼鏡をかけた副科長が入って来た。彼は四十二、三の男だ。頑丈な太い頸から続いて真っ直ぐに大きな頭が立っている。凹凸のない広い顔をしている。鼻は低く、眼は小さい。しかしこの眼は、小さいくせに、金縁眼鏡の奥から、相手の顔を鉄面皮にズブリとやる豊針のような視線を持っている。その眼の上の薄い眉毛。扁平な額。頭の頂辺には、髪の毛が五、六本塊って、怒ったように突っ立っている。全体がまるで肥えた竹の子のような感じだ。彼は入って来るや否や、隣の男の枕元にある図面を見て大きな声で言った。

「いよう。やってるね。出来たかね」

「ま、どうやら。あのなあ。さっき、内科へ行って見てもらいましたが、右が少し悪いが、他は何ともないと言っていました。血液の方も調べて貰うてます。薬も貰うて来ました。」

「ウン、ウン、誰に見て貰った？横井君かね？」

「へえ、横井先生です」

副科長は、突然私の方へ振り返った。

「さあ、色男！どうだい」

私は苦笑した。私は付添婦がオリ―ヴ油で、顔の白い薬をあらかた除ったところであった。これは診察して貰うためである。色男とは白い薬が、田舎廻りの馬の脚でも連想させたのだろう。しかし、この副科長なら鼻の曲った患者にさえも、――いよう色男――と平気でやり兼ねないのだ。

彼は私から診察を始めた。私の頬や額を、指で押してみる。

「ウン。大分、いい男になったじゃないか。ウン」

色男の私が、一層いい男になったら、全くお天道様にすまないと言うものだ。

「よしツ。注射」

付いて来た看護婦が進み出た。黒いゴムで私の腕の上を押えた。静脈が蒼く浮き上がった。副科長はそこへ針を刺した。注射の手際は、全く見事だった。

「さあツと」

彼は立上ると隣の男の方へ行った。私の方は、そのあと付添婦がすぐ薬を塗ってマスクをした。隣の方ではコチヨリ、コチヨリと水の落ちる音がする。何をしているのか判らない。医師が大きな声で言う。

「滋養を摂るんだね」

「ハア」

「どうせ寝ているんだから、両方治すつもりでやるさ」

「ハア」

隣の男は、そう自由に返事が出来ないらしい。このただ「ハア」と言っているだけの返

事が少し哀れにきこえる。

「さあツと」

副科長は立上って手を洗った。出て行こうとして私の方を見た。私の枕元には本が二、三冊散らばっている。それが彼の眼にとまったらしい。副科長は私に訊ねた。

「平常は、朝遅いかね」

「遅いですね。夜おそいものですから」

「何時に寝るかね」

「二時か三時でしょう」

「遅いなあ、インテリは、朝遅くて不可んね。朝早く起きて、畑の夜露を裸足で踏んで歩くんだ。そうして体を改良するんだね」

私はそれをきいて腹が立った。

「僕は幼い時から、皮膚が弱くて困っていたんです。他の人と同じ魚の切身を食っても、僕だけが皮膚に出来たりして。よく母がそう言っていました」

これが抗弁になっているのかいないのか知らないが、私は抗弁のつもりだった。

「フーン？」

副科長は、私の上にかがんで、乱暴に私の胸をはだけた。そして手に持っていた、喉を見る時に使うような硝子の棒で、私の胸の肌に入力して乱暴に、ぐい、ぐいと、十文字を書いた。肋骨にゴリゴリと当たりその痛さに私は思わず顔をしかめた。副科長は立上って、眺めていたが、やがて嬉しそうに叫んだ。

「ある！反応がある！」

私は猛烈に腹が立って来た。人を馬鹿にしてやあがる！俺だって人間だぞ！

彼は、線香花火を見て嬉しがる子供のようになり、再び、

「反応がある！デルモグラフィスムだ！」

と言った。デルモ何か言うのは一寸言いにくそうであったが、素人脅しのペダンテイズムがそれを強行したのだろう。そしてたちまち思い付いたように身を返して、後も見ずに、手に持った硝子棒とゴム管を乱暴に振りながらドカドカと出て行った。私はもうカンカンになってしまった。

「上手な先生です。あのせんせいは」

隣の男が私に向って言った。

「矢つ張り経験だすなあ、注射や洗滌のうまいことと言ったら、あんた。名医です」
私は返事もしなかった。

私はそれから後、三日間入っていた。

退院した時、治ったのかと言えば、まあ治ったのでもあり、治り切れなかったのもあった。手の方はずっと前からよくなっていたが、顔の方は退院する二日前に、もう大丈夫ですと言われるところまで来た。そして何か赤っぽい薬を塗られた。少し硬めの膏薬で、多分仕上げの薬だったろう。丈夫だと言われた時は、自分で触っても肌がすべすべしているのがよく判った。ところがこの膏薬を塗ると、またポツポツ出来て来た。これは不可んと言うので、また以前の手当に逆戻りした。私はがっかりした。

丁度その翌日が、科長の診察日になっていた。私は、そのポツポツ出来たのを、伊原先

生に見て貰った。

「皮膚が弱いんだねえ……じゃあ、一つ、ここの薬局にある薬を色々試して見よう」

私はその言葉をきいて、ギクリとした。先生は気軽にああ言ったけれども、これは私にとつては重大問題であつた。処置室の棚を見ても、十五六種以上も膏薬の瓶が並んでいる。白いの、緑色の、薄紅いの、泥色の、赤茶色の、焦茶色の、黒いの、とさまざまの色をしている。汚らしさも相当だ。何だか不精な画家のパレットを思わせる。見ただけでも余りいい気持ちがない。こんなのを、一つ一つ私のこの自分の肌で試すのだろうか。私の弱い肌は、どれにも敏感にかぶれるに相違ない。柔らかい薬にはべつついた皮膚のうるみから、矢張りそういうニチニチした吹出がするだろう。固いの中には、その薬が皮膚からそり上がるように乾いて、毛穴を持ち上げて、恐ろしい痒みと共に皮膚が発熱するだろう。第一、この膏薬共の如何にも毒々しい色づきからして、私には皮膚感覚に直接訴えて来るものがある。

馬鹿な私は、薬を色々試みて見る方法が本当の皮膚病の治療であることを知らなかつた。これは本来は治病一般の方法だろうが、この合理的な方法が、皮膚病では最も手軽に出来るので、その点これを大いに利用しなければならぬのだ。患者は、医者や患者の肉体に個性のあることを忘れて困る、とよくこぼす。その点も色々な薬を試して見るという方法は、その患者の個性を発見することであつて、患者がよく納得出来る筈の方法である。―――全身に、吹出がした。医者は左右の腕に別々の薬を塗った。翌日結果を診て、ああ君は左の薬が効くと言って、改めて左の方の薬を全身に用いた。その患者はその時は一寸気を呑まれたような顔をしていたが、後で馬鹿にしたもんだとプンプン怒っていた。だが、

その方法で治ったのである。皮膚病と言うのは、患者が腹を立てれば悪化するというほどデリケートな病気ではないと見える。そうすると副科長のようなのが、皮膚科の如何にも皮膚科的な臨床家ということになるだろう。

医者から、一寸非人間的に扱われて、ブンブンするのは、如何にも患者らしい気持ちだ。これは一つの患者精神とも言うべきものだ。私もこの患者精神は極めて発達している男である。今度の吹出にも、最初、医者はと二の足を踏む気持ちになったのは、この精神のためであった。その夜、私はこれは大変なことになったぞと考え続けた。どうすればいいか……逃げ出すより他はない。——こういう考えを起す自分に対して、私は衷心からお前は馬鹿だ、と言わざるを得ない。お前が永く生きるつもりなら、何時かは温泉がだめだと言うことが判る時が来るのだ。何時かは病院に再び厄介になり、そしてあらゆる薬を試して見なければならぬ時が来るのだ。それなのに、今の今そのいい機会を得ているのに、ただひたすら逃げ出そうとする。お前は実に馬鹿野郎だ。

翌日、副科長の回診の時、私は彼に言った。

「退院したいんですが」

診察を終えて、手を洗っていた副科長は吃驚したように振り返った。

「退院？だが、君、科長はこれから薬を試して見るんだって、言ってたぜ」

「いや、そうですが……」

私は一寸口籠った。

「ゲルトの問題です」

半分は本当である。はいる時にファーター先生に用意してもらった金は、段々乏しくな

つて来ていた。

「ああそう。それなら、退院し給え」

彼は簡単に点頭うなずいた。私はホツとした。これでこの男にも逢わずにすむ。

私は翌日退院した。家へ戻ると、私は早速マスクを除いて脱脂綿で油薬を拭いた。一昨日の薬にかぶれたところは、大かた治っていた。剥げちよろの鏡で見ると、未だ顔の肌は荒れたようにけば立つて皮膚がよく出来ていないせいか、赤肌のむき出しのようであった。顔一面が赤いので、酒に酔っ払っているようだった。目も黄色く白眼が濁っていた。髪の毛に真つ白についている薬がよく拭いきれなくて、白髪のようにだった。しかし兎に角これは私の顔だった。私は一週間ぶりで自分の顔を、笑えば笑う自分の顔を、眺めることが出来たのであった。

私は白髪のような髪を撫でつけて外出した。戸外の空気に触れると、赤肌の私の顔は少しヒリヒリした。

私は構わず歩き回った。入院したばかりの時、感じていた病院の恩恵などは、とうの昔に忘れてしまつて、こうしてぶらぶら出来るのがただもう楽しかった。

三、四日してうやむやの中に、私の顔はもと通りに治ってしまった。私は又もとの生活にはいった。病院から残ったものと言えば吝嗇の倍加した勢力だった。吹出には動物性の食物でない方がいいと言うことを私は信じ始めた。植物性のもので油その他の、かりにも美味と称せられるあらゆるものは余りよくない。不味いものなら大抵大丈夫だ。白い飯に沢庵。これが自分の理想的な食い物である。私はこう結論した。勿論、吝嗇は双手を挙げて賛成した。考えて見ると変だ。嘗て吝嗇はこの病氣の原因の一つであつたのに、今度

は何時の間にか、あたかも病氣の原因を除く役目を持っているかのような顔付をしている。何時もの男性的な吝嗇にも似合わず、狡猾な転向振りと言わざるを得ないではないか。気持のいい秋も過ぎて行った。寒くなって来た。しかし、雪が降るには、未だ早い。いい天気は、ずっと続いていった。仙台の町の内外では方々で、秋祭りの神社の太鼓がさかんに鳴っていた。

或る夕方、暗くなってからわたしは元寺小路を散歩していた。何処かへ行って帰って来た時だったろう。私は家に帰って帽子や荷物を家の中へ放り込んでおいて、そのまま街に出たのだったろう。帽子は被っていなかったが、一張羅の洋服を着て、平常に比べれば、些か颯爽としていた。少し寒く、私はオーバーを着て来なかったのを後悔した。

私は時々通りの店を覗いて立止まったりしながらブラブラと歩いて行った。ふと見ると、前方のバスの停留場に二人の婆さんが立っていた。何だかどうも見たことがある婆さんだ、と思つて近寄つて見ると、病院で世話になった付添婦の鈴木婆さんと増田婆さんだった。病院で縞のユニフォームを着ているのと違つて、こうして如何にも婆さん臭い黒っぽい着物を着ていると、一寸見覚えのないような姿に見えた。二人はバスを待っているらしい。そわそわしてキョロキョロしている。そんな様子も病院にいるときの落着いてテキパキした様子とまるで違つていて、可笑しかった。これでは、まるでほんとに田舎の婆さんだ。私はニヤニヤ笑いながら傍へ寄つた。二人は私の方には振り返りもしないで、まだキョロキョロしている。私は声をかけた。

「おいおい」

突然、二人は何故か私から顔をそむけるようにして駆け出した。まさか私の声を聞いて

驚いて逃げ出したとも思えないので、私は呆然として見送った。二人はまるでお祭に出て来た田舎の小娘のように、手をつないで駆けて行った。おかしな奴等だ。私は苦笑しながら歩いて行った。二人の駆けて行ったのは、私の歩いて行く方向だった。

しばらく行くと、二人が次の停留場に立って、相変わらずキョロキョロしているのが眼にはいった。何だやっぱりバスに乗る気なのか。何だってさっきはあんなに驚いたように駆け出したのだ。本当におかしな奴等だ。病院にばかりいるので、たまに町へ出て来ると、気が転倒してしまうのか。私は再び二人に近付いて行った。気のせいか、近寄って行くで一層彼女達は、そわそわキョロキョロし始めるようだ。どうもおかしい。私は思い切って近付いた。

「おいおい、おばさん」

驚いたことは、二人は前にも増して慌てだした。私が、再び声を掛けようとする、

「やんだ、この人あ」(「厭だ、この人」)

と、鈴木婆さんが袖を振った。二人はもうすっかり慌てふためいて、まるで追い掛ける子供の手から逃げ出そうとする水澄ましのように、前に立った私をぐるっと廻ってよけて、ガタガタ下駄を躍らせて駆け出した。

丁度そこへバスがやって来た。病院前行である。二人は気違いのようになって呼びとめたので、バスは停留場を十間ばかり行き過ぎて止まった。二人は気も心もないように慌てながらバスに乗った。バスはうめき声を立ててスタートした。

二人は、てんで私が判らなかつたのだ。判らないどころではない。大変な恐がり様である。この見も知らぬ若い男が、馴れ馴れしくニヤニヤしながら寄って来る。ただ事ではな

い。二人は若い時分からの本能的な恐怖に駆られたに相違ない。病院とは違って馴れない街中では、一層恐ろしかったのだろう。

私は今の自分の姿を顧みた。あの時は、浴衣一枚だった。今は兎に角、一張羅で私としては些かりゆうとしている。それから顔だが。そうだ！あのマスクだ。マスクがない！

私は可笑しくなって、大きな声を挙げて笑った。要するに、それだから婆さん達に判らなかつたのだ。顔そのものも、今は病院にいた頃のように赤肌ではない。葉で白髪のようになっていた髪も、今はもとのように黒い。あの副科長が言ったよりも、もっといい男になつていたわけだ。私は続けざまに笑った。

バスは、夜のアスファルトの道に少しばかりの埃を立てて、スピードを出しながら遠くなつて行つた。バスの後の窓の中には、婆さん達の顔が小さく重なつて見えた。その四つの眼は、多分、恐怖と安堵との交じつた色をたたえて、身も知らぬ若い男である私の方を、じつと見送つていたことだろう。

- 157 頁 透明人間：『作家ウエルズの作品『透明人間』を原作とした映画で1933年に公開された。透明人間であることを隠すため全身に包帯を巻いていた。
- 157 頁 陋屋……あばら屋
- 167 頁 耳盥……左右に取っ手が付いた容器。
- 167 頁 鉄面皮……厚かましい
- 170 頁 デルモグラフィスムス……擦ると赤く盛り上がる反応。
- 170 頁 ペタンテイズム……知識をひけらかす事。

題字のカットについて

「仙台 その二家」から「北国の懐郷病者 その七皮膚」までのカットにサインは付いていませんが、その七については掲載された新風土昭和十五年四月号編集後記に「小説は「北国の懐郷病者」の完結編。カットは水原氏の注文により、例の谷中画伯に御依頼したものである。」との記述があります。

その谷中画伯とは、料治熊太編著『谷中安規版画天国』の巻末年表の昭和十二年に「百間の紹介で小山書店を知り、十九年まで同店発行の小説挿絵に精力的な仕事をす。」とあり、このカットも谷中安規の作品と思われる。

小山書店の小山久次郎『ひとつの時代』や吉田和正『かぼちやと風船画伯 愛と幻想の版画家・谷中安規の生と死』にも大変な奇行の版画家と描かれてあることからみて、編集後記に「例の谷中」という表現になったものと思われる。